



徳島大学附属図書館報 No.42

1990.10.

“LIBRARY”

板東潤子

日々追われるレポート。私は、レポート提出日の直前などには、図書館でアフター5を過ごします。これが、今トレンディー！

私は、図書館を愛用しています。なぜなら、多くの本と出会い、自分に幅広い知識を身につけることができ、人とのコミュニケーションも生まれることがあるからです。そこには人と本のふれあい、人と人とのふれあいが存在すると思います。

今は、専攻に関する書物を手にとることがほとんどですが、時間があれば他の分野の書物も読みたいと思っています。恥ずかしながら私はいまだに、人生を変えるような一冊の本に出会っていません。そういう本に出会えるまで図書館の本をかたっぱしから読んでみるのも楽しいでしょうね。

今後も、図書館を上手に利用してよりよいレポート、論文の作成に努力していこうと思います。また、それとともに幅広い知識・人間性を養うため、一生読書を怠らないようにしていきたいものです。

(薬学部薬学科3年)

「図書館よ飛んでかないで」

篠原信博

社会は、自然環境、我々が作り出した情報、物質、そして、我々自身という諸細目が有機的に絡み合って形成された包括的システムである。我々は、自らの進化の過程で、この自然に働きかけることにより有用なエネルギーを取り出し、改造し、文明社会を構築して生活をより便利なものにしてきた歴史を有する。しかし、社会が一度そういった諸細目の統合として、人によって形成されるやいなや諸細目同士は相互に影響しあって、自己を組織化してゆく。そして社会は、創造者である我々から時として離れ、一人歩きを始めてしまうのである。皮肉な話である。いったん人の手から離れ、自己を自己で組織化しながら増長して行く社会は、時として人を驚愕させる。

ここで、この図書館という物も、人間が社会に投じた諸細目の一つであると言える。人間は、

高度な文明をつくり生活を豊かなものにした。そして、人間はその文明生活の味をいちど覚えてしまうと、さらに上を欲するようになる。その絶え間ない人の欲求は、さらなる文明社会の構築へと自らをかりたてる。その社会の中で、人は良く生活して行くために、今まで以上の、つまり自分が体内に記憶しておけない程の情報量をも欲するようになる。その結果、人は体外にその記憶を一時的であれどうであれ、留める装置を作ろうと欲するようになる。その欲求が、人をして図書館という体外記憶装置を作らせた原動力となるのである。人は、自己の属性として当初は、この図書館を社会に投じてしっかりとつなぎ止めておき、コントロールしていたのであるが、しかし、一度社会性を持つに至った体外装置は、上記したように自己組織化を始め、やはり一人歩きを始めてしまうのである。それも社会的装置として。もし、この図書館という社会の中に取り込まれてしまったこの装置を、これ以上好き勝手にさすのが嫌であれば、人は人をしてこの装置が一人歩きしないように、たえず注視しておく以外方法はない。社会の中に人が投じた物質、情報は人の手を離れて、社会という一つの自我意識の総体にとって代われ、一人一人の人間を時に苦しめることもあるのである。これは表裏一体のことであり、事実である。皆でどこかに飛んでいかにないように、しっかりと身の周りのものをつなぎ止めておこうではありませんか。

(総合科学部4年)

図書館の利用法

藤 中 雄 一

思えば、大学生となるまで図書館なるものを利用した記憶がない。自慢にはならないが本というものの自体、あまり縁がなかった。それが大学生、特に専門学生になってからは図書館へ足を運ぶことが多くなっているようだ。理由は幼い頃から読書習慣が皆無の我が身を戒めれば明らかで、図書館利用の目的がかわったからにはほかならない。大学ともなればレポート等の調べ物に追われるのは日常茶飯事であり、高価な専門書を何冊も買えるわけでもないの、自然と図書館に足が向くのである。また、医学のように日進月歩の学問では「旬」の物が重要であり、専門雑誌に目を通すことも一応必要である。このような目的を考えれば、図書館は学生の経済状態をも左右しかねない存在とも言えなくもない。

以上述べた理由の他にも、自習の場としての図書館の役割も大きいのではないだろうか。自宅での勉強とは、何かと誘惑が多く、思うように進まないのは誰もが経験済みの事だと思う。このように、考えてみればいろいろな理由で図書館を利用しなければいけないようである。もっとも現在の図書館の状況に満足しているわけでもない。最新の情報を求めて本を探しているとき、旧字体で書かれた本のタイトルを見たときには、何か悲しくなってしまう。また夏に涼しい図書館で勉強していると、6時頃、日の入とともに急激に暑くなってくるのもやめてほしい。学生を追い出すのに2時間も余裕を取る必要はないと思うのは私だけではないだろう。今後も長く存在し続けるであろう図書館。新陳代謝の活発な若々しい図書館であってほしい。(医学部医学科4年)

明日からの図書館

松下正行

アメリカに関する広報誌「トレンド」に次の様なことが紹介されていた。

石油を中核とする資源、熱源にたよる現代社会は、多少の紆余曲折はあるとしても、経済的繁栄を継続すると予測される。これは、知識産業化を進め、社会全体が高度に知識化されるともいえる。人々の半数以上は、知識に基いた情報の収集、分析、合成、体系化、蓄積、検索に従事することとなり、管理職となる大学卒業者の8割以上が知的労働者になる。

これらの人々は、徳島からでも、世界中の図書館の蔵書カード目録を、コンピューターによって検索できるようになるだろう。参考図書、とりわけ、百科事(辞)典、図版は、ビデオディスク化され、安価に個人所有可能となるだろう。

このような社会での教育は、といえば、社会全体での職業教育、訓練が重要となる。学校は、生徒、学生のみを通う器というだけではなく、成人、社会人、とりわけ、主婦、高齢者の精神的活力維持、社会参加の発着地点としても使用されるようになる。大学、研究機関等では、夜も教育、研究が行われる。労働時間の短縮は、深い思索、新しい知識の獲得、あらたな職業能力の開発を促進する。

これを助けるためには、当面、知識、情報の殿堂である図書館も、人々の知的活動の場として開放される運びとなる。利用者は、図書、とりわけ、定期刊行物を参照して、知識集約型・開発型の研究者の学習方法をとるようになる。このとき、この動向に、大学の図書館が応えられるか否か、問題となる可能性すら内包している。

このような展望のもとで、図書館の進むべき方向を探ってみると、どのようなものになるだろうか。

地球上での、過去から現在までの人間精神の軌跡を集めたものが、図書館であるから、これに興味をもつ人であれば、子供、大人年齢の別なく、入館を歓迎すべきであろう。収容能力いっぱいまで受け入れることこそ望まれる。開館日時は、本の霊が不平を鳴らすことはないので、24時間としたいが、当面、早起きの学生が登校して、心を落ち着ける場所として最もふさわしいもので、7時から夜中12時まで、これを365日継続する。図書が、これを望んでいる。貴重図書、資料は、複製をつくり、他の図書同様、消費材、消費品と考えるよう頭を切り替える。管理という桎梏から解放されて、利用者の掌中に、直接預けてみてはいかがなものであろう。貸出し冊数制限、持ち込み図書票等、禁止事項は極力撤廃する。

建物に入り易くするため、貸し出しは、出入口の近くで、一階にする。所持品の携帯は自由、ロッカーなどは使用しない。正面には、索引カード、書誌目録冊子、コンピューターディスプレイ機器を置き、お目当ての本の所在を瞬時に知り、現場に直行できるようにする。カードは、図

書、建物、書架の縮小したものであるから、現物と、二重に、つまり、書名と著者名とで一致していなくてはならない。ところが、大学の図書館の書物の大部分は研究室の中で、あるものは眠っているものもある。これを目覚ませるには、研究室を朝から夜半まで開いておかななくてはならない。よって、これらの書物は、図書館の開架に戻す方が、利用価値が出るはずである。本は、できるだけ多くの人々の目と手に触れられることを求めているのである。

図書館の職員は、本の虫であるから、独自の方針と予算をもって図書収集を行って欲しい。同時に、資料収集、書誌目録作成、その中の図書の取捨選択等をお願いしたいと思います。まさに図書館は、知識、情報の頭であり、心臓なのです。知的好奇心を思う存分に満喫させてくれる楽しい、心なごむ場所であって欲しいと思っています。それも、明日の朝から。

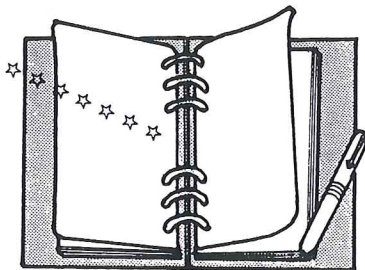
(教養部教授 英語)

図書館について思う事

秦野 真由美

学部の1年から3年の間は、テスト前などになると、よく図書館で勉強したものです。夏涼しく、冬暖かく、落ち着ける所でした。そこで勉強している学生達も勉強熱心な人が多いせいか、その気になればいろいろな情報が入手できました。また参考図書が揃っていて勉強する為の環境としては最高の場所だったように記憶しています。しかし、卒研に着手して、自分の研究室が与えられると、息抜きの為の場所が完備されていない事の不便さが気になり始めました。雑誌等を読む場所はありませんが、できれば、自動販売機などを設置した談話室があればいいと思います。また、他の大学にあるような、ディスカッションのための小部屋があれば、周りに遠慮なく討論する事ができます。この点の改善を考慮していただきたいと思います。

(工学部工学研究科2年情報工学専攻)



図書館利用雑感

矢田 淑子

私は、図書館の雰囲気が好きです。たくさん蔵書が書架に、整然と並んでいるのを見ると、この本一冊一冊に、私の知らないいろいろな世界が広がっているのだらうと思ひ、軽い戸惑いと共に、心が引き締まるような気がします。

明るい照明に照らされ、印刷インクの匂いがまだ残っているような新刊本の並ぶ書店にはない使いこまれた本の落ち着きと、位置の確かさがあり、蔵書特有の香りは、あたりの空気をやわらかく、心を落ち着かせてくれるようです。

私の過ごした大学の図書館は、学部も多くない関係で、総合大学である徳島大学図書館のように、総記から文学までの分類の蔵書が満遍なくあるというようではありませんでしたが、それでも学部で使う専門図書はかなり揃っていたように思います。

学生時代、レポート作成や演習の下調べなどに図書館をよく利用しました。事典や辞典類などを見る手順や、目を通すべき参考書の類を、先生や先輩に教わり、今ならコピーで手軽に間に合う所をノートに写すのですから手間がかかり、閉館ぎりぎりまでねばったこともありました。

卒業後、少しの間、大学図書館の仕事に携わったことがありました。その時感じたことは、先生・学生・司書の方々みんなが、図書館の蔵書に対する意識・関心を（少しでも）積極的に持つことで、図書館の雰囲気・蔵書の内容が生き生きとしたものになるということです。

例えば、先生が学生に読んで欲しい本、研究に役立つ本等が刊行された時には、逸早く図書館蔵書にする手続きをとることで、そのゼミの学生の図書館に通う回数は確実に増えると思いますし、そうした学生は、研究したいテーマの参考書や、関連の図書にも関心を持ち、上手な図書館利用ができると思います。又、司書も希望された図書が届いた時など、先生にお知らせするのは楽しいものです。みんなのちょっとした関心が、使いやすい生き生きとした図書館を作っていくのだと思いました。

残暑厳しい8月末のある日、大学図書館に行きました。学生が机に向かい調べ物や勉強をしています。運動していても、構内で討論している姿も、新鮮で未来があって「学生っていいな」と思いますが、机に向かい一生懸命勉強や調べ物をしている姿が、やはり一番学生らしい美しい姿だなと思いました。

その反面、休みの期間中で、利用者が少ないのはどの大学も同じだと思うのですが、一般の図書館では、朝9時開館に列をなして席をとっている高校生・浪人生の姿を考えると、静かに研究できる図書館を利用しないのは、もったいないななどと思ったりしました。

一冊の本で人生の進路を決める人もいるといいます。最近読んだある作家の随筆に、印象深い読書方法が書いてありました。

今日はサルトル、明日は西田幾多郎、明後日はマルクスなどといった乱読は、それぞれの本にふりまわされ、消化しないままに終ることが多い。これはという自分の肌に合った本を見つけたら、くり返し読んで自分のものにする。そうすると、その本の作者のいいたいこと、又作者が影響を受けたものが何かにゆきあたる。その物(人)を調べることによって、より深く理解でき、又新しい興味がわく。一冊の本から入って、体系的にいろいろな世界を広く深く理解できるようになるという意味のことが書かれていました。

大学図書館には、指定図書コーナーも設けてあり、自分の関心のテーマを見つけることがより可能かもしれません。私も遅ればせながら、このような読書方法をしてみたいと思っているところです。(聴講生)

図 書 館

菅井哲也

学生時代、私は図書館を本来の目的で使ったことがほとんどなかった。図書館へ行く理由といえば、もっぱら気ばらしに雑誌・新聞を読みに行く、テスト前に直前情報をあさりに行くなどであった。今あらためて考えてみるとなんと貧しいことだろう。

その理由を考えてみて、最初に思いあたることは、私は前からあまり本というものを読んでこなかったということである。私が図書館をあまり利用しなかった理由はここにあると思う。

最近の若い人は、あまり本を読まないといわれている。近ごろ、本を手にしていない人もたくさんいると思います。読書の秋です。久しぶりに本を読んでみませんか。私も行ってみようと思います。図書館へ。(医学部附属病院研修医 眼科)

「独創は闘いにあり」を読んで

真鍋容子

私達は結局のところ、毎日をなんとなく過ごし、不平不満を持ちながらも身内でぐちを言うだけで、決してその状況から抜け出そうとはしない。平々凡々とした今の生活からいつかは達人、英雄になりたいと思うことはあっても、その為の努力をしようとはしない。目標を持つこともなく、その日暮らしの生活、安易な生活に慣れて、将来のこと、社会のことに目を向けられなくなっていることに気づく。そして世に名声を得ている人を、単に「生まれつきの天才だ」とか、「環境がよかったからだ」と決めつけて、どこか自分の生き方に言い訳をしている。ともあれ、私は薬学部を自ら選択し大学生活を送り始めた。今のままでは、ただその他多数の一人として、薬剤師の資格とひきかえに卒業するだけである。

今回この西澤潤一の「独創は闘いにあり」を読んで、彼の生き方を天才の生き方、自分とは全

く別世界の人の生き方ととらえてしまっただけだと思っただけだ。結果として、彼は華々しい成果を上げたし、彼自身の才能がそれに大きく貢献していることは否定できない。しかし認めてもらえなかった時の彼の研究姿勢は大いに学ぶところがあると思う。

まず意外だったのは、科学者にありがちな新しもの好きでは決してなかったということである。あれだけの特許を出し、結果的に最先端を走っていたわけだから、さぞかし好奇心の固まりで、新しいものに首をつっこまずにはいられない性格だと思っていたが、むしろ彼は、できることならば避けたいと考えていたのだ。しかし、だからこそ新しい発想でもって、第一人者となれたのである。もし、最先端の情報に巻き込まれていたら、結局レベルの違いこそあれ、トップ集団の中の一人でしかなかったであろうし、自分の信念を貫くこともできずに、その他多数と共に時を過ごしてしまっていたであろう。だからといって当然のことではあるが、世界の最先端の情報を知らなかったわけでも、理解しようとしなかったわけでもない。彼は、自分が人の十倍の努力をして自らが行ってきた実験をもとに、社会への貢献、技術革新に生かせる情報源としていたまでなのである。つまりその論文にどれだけのネームバリューがあるかではなく、どれだけの事実とヒントが隠されているかを読みとっていたのである。これは意外に重要なポイントではないかと思う。私達は本来、文献から事実を読みとろうと努力しながらも、結構、誰の書いたものなのかとか、何に出ていたものかということに左右され、権威者の書いたものはうのみにして、名のないものは見下したりしがちではないだろうか。

また、彼は真理にどん欲であり、決して自分の体裁のために曲げたりはしない強い精神力の持ち主であった。ただ本の中にあるように彼は反抗期の子供のようにやみくもに反発していたのではない。むしろ、父親の影響を受けて、父親や研究室の教授にたて従う姿勢をとっている。一面から見れば、自分中心的な感じをうけるが、実際にはすべて世の中の為に自分を投げうっているわけであり、自分の名声の為に外面が良いだけの偽善者とは異なる。彼が特許にこだわっていたのは、その財源をよりよく研究費にあてるためであり、また研究のプライオリティを大切にするという点で当然のことである。その当然のことすら闘っていかねばならない日本の研究体制に著者と同様に憤りを感じる。しかし、本当に自分が正しいと思えば、確証が得られた時、すでに確固たる体制に自分なら闘っていけるだろうか。闘っていく為には確信を得る為の努力と、たとえ自分がどうなってもいいという無視の気持ちがないと到底無理であろう。

しかし、彼ですらその闘いは困難であったし、不安であったことは読むことができる。やはり外国の一人者を強く意識しているし、節目ごとに自分はこれでよかったのだと自分を納得させている感じがする。それほどまでに新しく独創で勝利していくには厳しい道がある。だからこそ、その闘いの勝利者は、前例をみないほど雄々しくなれるのであろう。

私達は、華々しい結果だけではなく、その忍耐強い努力と不屈の精神力を彼から学びとるべきであろう。

(薬学部製薬化学科1年)

私 の 研 究

服 部 匡

外国人留学生諸君の日本語学習の援助が私の仕事なのですが、今日は少し違う話をさせて頂きます。徳島市付近では、終止形が三拍（平仮名で書いて3字）の五段活用の動詞（「上がる、怒る、動く、浮かぶ、……」）がアクセントの面から2種類に分かれ、「上がる」などは終止形のアクセントが平板型、「怒る」などは頭高型という人が多いようです。実は古くは京都でもこのような区別のあったことが知られており、本来「上がる」の仲間の動詞には他に「遊ぶ、洗う、当たる、浮かぶ」など、「怒る」の仲間の動詞には他に「余る、急ぐ、動く、移る」などがあります。前者をA類、後者をB類と呼ぶことにしましょう。徳島や高知などではまだ、この二つの類の終止形のアクセントの区別がかなり保たれていますが、現在の京都・大阪など近畿中心部では、両類とも平板型で区別がなくなっています。つまりB類の終止形がA類と同じアクセントに変化してしまったわけです。その事情を簡単に言うと、終止形以外の多くの活用形では、A・B両類のアクセントが元々同じであるため、終止形のアクセントの区別（アガル 高高低 対 オコル 高低低）を維持するのが難しくなったものと思われまます。

さて、近畿でも周辺部では所によってこの変化がまだ進行中です。例えば私が調査した三重県伊勢地方の場合、南部には（少なくとも高齢者では）まだ徳島や高知に近い状態のところがある一方、北部では上述の変化が進行して大阪や京都の状態にかなり近づいています。ところがその北部でもB類のうち約10語以内の少数の語のみがまだ古い頭高型のアクセントを保持していて、平板型への変化の大勢から取り残されているのです。中でも、「困る、（これに）限る、思う、分かる、（金が、時間が）かかる、頼む」という6つの動詞は古いアクセントの残存率が極めて高く異彩をはなっています。なぜこれらの動詞だけが頑固に古いアクセントを保っているのか不思議で合理的な理由を求めたくになります。（共通の音韻の特徴があるようには思われません。）

まず考え付くのは「良く使う語形には古いアクセントが残り易いのではないか」ということです。この方言の会話を大量に録音して、例えば「困る」という語形が何度出て来るかを調べるといったことは実現困難なので、かわりに大阪落語の口演を記録した本で、三拍の各動詞が終止形で何度用いられているかを調べてみました（全部で290語出現）。多い順に8位まで示すと①違う ②思う ③困る ④わかる ⑤頼む ⑥帰る ⑦かかる ⑧貰う（「違う、貰う」はA類で他はB類）で、問題の6語と5語まで重なりあいます。しかし、「限る」の出現は少ないし、直感的にもそう高頻度の語とは思われません（その語の「総使用度数」に対する「終止形での使用度数」の比を取ればより適切かも知れませんがこれはまだ調べていません）。

ここで観点を変えると、問題の6動詞には共通の意味特性があることに気づきます。それは、終止形言いきりで用いた時に、典型的に「状態」か「性質」を表すと言うことです。「そう思う、

そんなことをされては困る，お前の言うことは良くわかる」は，いずれも話者自身の現在の心的態度（状態）を示しますし，「頼む」も「ちょっと頼む！」といった用法ではこれに準じます。「2万円かかる」とか「これに限る」は時間的限定を離れた性質を表すものでしょう。いずれにしても「遊ぶ，動く，壊す，死ぬ」といった「動作」や「状態変化」を表す動詞とは性質を異にしています（そもそも「思う」などの終止形での使用頻度が高いのは，一つにはこうした意味特性が反映していると思われます）。逆に典型的に性質状態を表す動詞でこの地域で古いアクセントを全く保存していないのは普通に使う動詞では「似合う，目立つ」ぐらいのものです。

加えて，どうもこの方言ではこの意味特性が，頭高型のアクセントと親和しやすい傾向があるようなのです。というのは，「頼む」も「頼む！」と人に頼むときのみ頭高型が自然で，他の場合は平板型が自然であるとか，「かかる」も金や時間がかかるのなら頭高型だが，「水が服にかかる」というときはむしろ平板型が自然であると言う話者がかなりあるからです。恐らく頭高型の音調につきまとう「強い」あるいは「断定的な」印象に関係があるのではないのでしょうか。

こうした傾向は実は北伊勢だけの現象ではなく，近畿の意外に広い範囲で起こっているふしがあり今後の調査が必要です。いずれは徳島でも良く似た状況が出現するのかどうかは分かりません。

図書館で書物を勉強することも大事ですが，時には自分の常日頃使っている言葉について反省的に考えてみると，案外面白いことに気がつくかもしれません。

万一こうしたことに興味を感じられた方は，附属図書館にある，「日本の言語学」シリーズ（大修館）所収の関係論文等を参考にされると良いと思います。（教養部講師 日本語・日本事情）

本学教官著作寄贈図書

（平成2年4月～9月受入分）

（敬称略）

著者	書名	出版社	寄贈者
松田佳子 寺田 弘 他編	膜酵素 基礎と実験 I, II	廣川書店	松田佳子
高杉益充 他編	続・薬剤副作用軽減化の工夫	— 医薬ジャーナル社	高杉益充
高杉益充 監修	薬剤識別コード事典 平成2年改訂版		高杉益充
高杉益充	副作用症例報告集II		高杉益充
高杉益充 編	改訂版 消毒剤 基礎知識と適正使用		高杉益充
高杉益充 他編	新・病院薬局実務		高杉益充
高杉益充 他編	新薬の副作用と処置改訂3版	薬業時報社	高杉益充

オンライン“蔵書検索システム”スタート真近!

今までは、徳島大学の蔵書を調べるには、図書館に来て現物を探すか、又はカード目録を使って調べるといった方法が一般的でしたが、新しい検索方法として、

- ① 学内のどこからでも利用できる
- ② はじめての人にも簡単に使える

ことをモットーに、電算機を利用して、カード目録よりも多彩な検索（例えば正確な書名がわからなくても「徳島大学」(トクシマ タ”イカ”ク)と書名の一部を探すなど)が可能な検索システムを情報処理センターの協力を得て現在開発中です。このような検索システムは、一般にOPAC(Online Public Access Catalog)と呼ばれています。

この条件を満たすために、①については、本館に2台、分館に1台の利用者用端末を各々2階閲覧室に設置する他、情報処理センター内及び蔵本分室内の端末からの利用やセンターに接続できるパソコン等があれば研究室等からでも利用できること、②については、検索画面を表示して適当な条件や検索語を指定すればよく、もし操作方法がわからなくなったらヘルプ画面を呼び出せば説明画面が表示されるという仕組みを考えています。

検索できる資料は、和洋それぞれの図書・雑誌(将来的にはCD・ビデオなどの視聴覚資料の検索サービスも含める予定)で、まず11月中旬をメドに図書館内設置の専用端末による検索サービスを開始し、今後の予定として情報処理センターの提供による①で述べたような全学レベルでの公開(来年1月を予定)を考えています。

完成の暁にはぜひご利用ください。

●●●●●●●● 編 集 後 記 ●●●●●●●●

変わりゆく自然現象と世界情勢!図書館の情報サービスも例にもれず変革しようとしています。文字によって想像の世界へと馳せた時代から、具現化された視聴覚的世界へと取って変わろうとしています。(図書館は図書の館から電子の館へと—OPACもそのひとつです)

しかしながら、今もなお、歴史的文化遗产である図書の価値は、多大で、あらゆる研究に貢献しています。

今回は、図書館のサービスのあり方や図書館の上手な利用の仕方などについて、皆さんのお友達や先生方が投稿してくださいました。

あなたがたの良き友として図書館をより良い方向へ変えていきましょう。

編集委員会：委員長・宮本博司 委員・熊谷正憲、三村康男

発行 徳島大学附属図書館

(〒770) 徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島(0886)23-2310 内線(6111)

FAX 附属図書館(0886)55-9593 蔵本分館(0886)33-2950